



Data

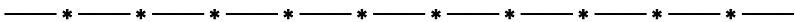
監督・脚本・編集：是枝裕和
 出演：リリー・フランキー／安藤サクラ／松岡茉優／池松壮亮／城桧吏／佐々木みゆ／緒形直人／森口瑤子／山田裕貴／片山萌美／柄本明／高良健吾／池脇千鶴／樹木希林

👁️👁️ みどころ

「万引き家族」とは一体ナニ？まずはそのタイトルのインパクトに驚きだが、“家族”を描き続けてきた是枝裕和監督ならではの出来にカンヌが絶賛！21年ぶりのパルムドール賞（最高賞）の快挙を！

企画の発端は、現実起きた年金不正受給事件。日本社会も末だと思う事件が感動を呼ぶ作品になるのだから、映画は面白い。これぞ演技派！の面々に、監督が発掘した子役を含めて、全編を貫く俳優たちの演技力を堪能したい。

万引きは悪い事。死体を勝手に埋めるのもよくない事。しかし、それが家族の絆を維持するためであれば・・・？いやいや、それでもダメ。普通の答えはそうだが、さて本作では・・・？



■□■カンヌのパルムドール賞（最高賞）おめでとう！■□■

2018年5月20日付の新聞各紙は、是枝裕和監督の『万引き家族』（18年）が第71回カンヌ国際映画祭で最高賞のパルムドール賞を受賞したことを一斉に報道した。同賞の受賞は、①衣笠貞之助監督の『地獄門』（53年）②黒澤明監督の『影武者』（80年）③今村昌平監督の『楢山節考』（83年）④今村昌平監督の『うなぎ』（97年）に続く五度目で、21年ぶりの快挙だ。

授賞式後の審査員の記者会見では、審査委員長の女優ケイト・ブランシェットが「監督のビジョン（展望）、パフォーマンス（俳優の演技）の素晴らしさなど、いろいろな要素を総合して決めました」と述べたが、私は何よりも、カンヌの審査員たちに、いかにも日本的な今を是枝監督流に切り取り、「盗んだのは家族の絆でした」というテーマでいかにも日

本人的な心情をいたるところに散りばめた本作が、理解され評価されたことが嬉しい。奈良を中心に活動する河瀬直美監督はカンヌ国際映画祭の常連で、①1997年の第50回カンヌ国際映画祭では『萌の朱雀』(97年)でカメラドール賞を、②2007年の第60回カンヌ国際映画祭コンペティション部門では『殯の森』(07年)でグランプリを受賞している他、すべての作品をカンヌ国際映画祭の「コンペティション部門」と「ある視点部門」に出品している。しかし、私の考えでは、これは河瀬監督特有の日本(人)的な特徴の売り込みによって成し遂げられたものだから、私の共感性は薄い。それに対して、是枝監督の本作のパルムドーム賞受賞は、まさに是枝監督が心の中に常日頃抱えている家族についての問題意識を、そのまま今の日本を代表する旬の名俳優たちの演技を活用して引き出したものだから、私の共感性は高い。

柳楽優弥が男優賞を受賞した2004年の『誰も知らない』(『シネマ6』161頁)もよかったし、審査員賞を受賞した『そして父になる』(13年)(『シネマ31』39頁)もよかったが、遂に本作で最高賞を受賞！是枝監督、おめでとう！

■企画のきっかけは？あったあった、そんな事件が！■

世の中は「モリカケ」騒動一色かと思っていると、そうでもない。次々に起きる凶悪犯罪の報道から、史上初の米朝首脳会談をめぐる攻防など、ニュースは多い。そこで大切なことは、テレビ・新聞・ネット上を駆け巡るこれらの情報の真偽を確かめることはもちろん、その中から自分に必要な情報を抜き取り、それをどう活用するかを考えることだ。しかして、是枝監督が本作を企画したきっかけは、死亡通知を出さずに親の年金をもらい続けていた家族が逮捕された事件だったそう。あった、あった、たしかにそんな事件が！

それは、東京都足立区の民家で戸籍上「111歳」になる加藤宗現さんとみられるミイラ化した遺体が見つかった事件で、これは2010年8月2日の新聞紙上で報道された。警視庁千住署の調べと足立区などによると、①部屋で見つかった新聞の日付から、加藤さんは死体が発見された32年前の1978年頃に死亡したとみられること、②加藤さんは1969年8月から老齢福祉年金を受給しており、元教員の妻が死亡した2004年には妻の遺族共済年金に切り替え、2004年10月から2010年6月の間、計950万円が加藤さんの口座に振り込まれていたこと、③「1978年に加藤さんが部屋に閉じこもった約10日後ににおいがした」「ほかの家族2人も確認した」と話しているため、加藤さんが1978年に死亡直後から家族はそれを認識していたこと、④そうすると、家族は加藤さんの死亡届を出さずに年金を不正受給し続けていたことになるため、本件は年金詐欺の疑いがあること、等が判明したらしい。この足立区の加藤さんの事件を皮切りに、全国で類似の事件が相次いで発覚。その中には、50年間不正受給が行われていたケースもあったそう。

この問題は、「消えた高齢者」として社会問題化し、年金詐欺を働いた家族はバッシング

されたが、是枝監督はこのバッシングの激しさに違和感を覚えて、年金と万引きで生計を立てている一家の物語を着想したそうだ。

■□■家族の中心は、樹木希林扮する初枝ばあちゃん！■□■

6月2日に観た『モリのいる場所』では、当時97歳の画家・熊谷守一の仙人のような生き様が面白かったが、その妻役で飄々とした演技を見せた樹木希林は、今や仙人のような女優。どんな役でもこなすのはもちろん、変幻自在のその演技ぶりと存在感はすごい。そんな仙人女優・樹木希林扮する初枝ばあちゃんが、本作では前述した加藤宗現さんのような役割を果たすが、それは本作後半のことだ。

本作導入部から前半に見るストーリーでは、初枝が「万引き家族」の中心としての存在感を見せつけてくれる。高層マンションの谷間にポツリと建っている平屋は今にも壊れそうだし、『モリのいる場所』で観た画家、熊谷守一の庭付きの家ほど立派ではないが、その土地建物の所有権は初枝ばあちゃん。その息子の柴田治（リリー・フランキー）は日雇いで建築現場等で働いているが、本職はどうも万引きらしい。万引きの実戦部隊はこの治と、その息子・祥太（城桧吏）の2人だ。しかし、治の妻・信代、そして一緒に暮らしている信代の妹・亜紀ら家族の中心にいるのは、いつもこの初枝ばあちゃんだ。他方、妻の信代（安藤サクラ）はクリーニング店で真面目に働いているが、今は首切り候補のトップにされているから、これも不安定。さらに、初枝ばあちゃんの家へ転がり込んで同居している信代の妹・亜紀（松岡茉優）は、怪しげな風俗系の仕事をしているが、そのハデさからして収入以上に支出も多そう。このように、このボロ屋に住んでいる万引き家族の収入は全員大したことはなさそうだから、家計の中心は初枝ばあちゃんの年金らしい。

本作中盤ではある不動産屋が初枝ばあちゃんの家を訪れ、1人住まい（のはず）の初枝ばあちゃんに対して、やんわりと家（土地）の明け渡しを要求していたが、もしこの初枝ばあちゃんが死んだら、その年金は誰が貰えるの・・・？まさか幽霊になった初枝ばあちゃんが銀行に行くわけではないから、受取人はその子供である治だろうが、初枝ばあちゃんの死亡届を出さないまま、そんなことが可能な・・・？加藤さんの事件ではそれはムリで、すぐに捕まってしまったが、さて、是枝監督が企画した本作では・・・？

■□■是枝監督が、またまたピットリの子役を発掘！■□■

是枝監督は『誰も知らない（Nobody Knows）』（04年）では柳楽優弥君を起用して見事カンヌ国際映画祭男優賞を受賞させた。また、6年間育ててきた息子が他人の子供？そんなバカな！をテーマにした『そして父になる』（13年）でも素晴らしい子役を発掘して起用した。それは本作も同じで、本作ではまず父親の治と共に健気に（？）万引き稼業に励む祥太の奮闘ぶりをしっかり鑑賞したい。

本作で特質すべきは、治と祥太が自宅に帰る途中、寒空の下近隣の団地の廊下で震えて

いた幼い女の子、ゆり（佐々木みゆ）。両親からネグレクトされた子供の身体のキズはカメラに映せばスクリーン上で表現できるが、親の虐待によって受けている子供の心のキズを演技で表現するのは難しい。しかし、この子役の場合は、演技なのか自然なのかがよくわからないままそれを表現しているから、お見事！これが是枝監督の演出によるものか、それともリリー・フランキー、樹木希林、安藤サクラ等の演技派の自然の影響なのかはわからないが、「万引き家族」に結集した芸達者な俳優たち全員の演技力がカンヌの審査員を惹きつけたことは間違いない。しかも、長い髪を切ってみると、この子は意外に美人。「かわいじゃん」との信代のセリフには、観客全員が納得するはずだ。

しかして、当初はかなり怯えていたゆりも次第に万引き家族に慣れ、今や家族の一員状態になってきたが、彼女の万引きデビューはいつ？治は「そのうちに」と言っていたが、実戦デビューの前には見学や小手調べも必要。そんな視点から今や兄になった祥太は妹を連れていろいろな教育を施していったが、さて、その成果は・・・？

■□■疑問1、子供がいなくなれば捜索願は？■□■

本作のチラシには、是枝監督の「10年くらい自分なりに考えてきたことを全部この作品に込めようと、そんな覚悟で臨みました。」との言葉がある。また、本作のうたい文句は、「家族を描き続けてきた是枝裕和監督が、“家族を越えた絆”を描く衝撃の感動作」だ。そんな本作における私の疑問（＝本作の問題提起）の第1は、治たちがいじめられていると思われる可哀そうなゆりを家につれて行き、1日、2日預かるのはいいが、両親が近くにいることは確実なのだから、早く警察に届け出る等の措置を取ることが必要なのになぜそれをしなかったの？ということ。そこでは、ゆりが可愛いからとか、両親の元に帰せばまたいじめられるから等の理屈が通用しないのは当然。そして、それくらいのことば、治も信代もわかっているはずだ。それなのに、何の処置も取らないままズルズルとゆりを家族の一員のように扱う日数が増えてきたばかりか、いよいよ万引きを仕込もうとなったのは、いささか疑問だ。

他方、自分の可愛い（？）娘が突然姿を消したのに、警察に失踪届や捜索願を出さない両親って一体ナニ？産んだら産みっぱなしの母親がいることや、子どもを完全にネグレクトしてしまう母親がいることは、時々大きな社会問題になっているが、ゆりを捨てたまま放置している両親が悪いの？それとも家につれてきたまま家族同様に育てている治と信代たちが悪いの？本作中盤では、そんな論点についてしっかり考えたい。

■□■疑問2、ばあちゃんが死んだら死亡届は？葬儀は？■□■

足立区の事件では3年間も加藤宗現さんの遺体が発見されなかったが、本作では初枝ばあちゃんの遺体はいつ発見されるの？それが本作最大の論点だが、その前に、初枝ばあちゃんが死んだら遺族は何をすべき？という根本問題、常識問題がある。つまり、その場

合は役所に死亡届を提出して、最低限でもいいから葬儀をすべきということだ。そうでなければ、下手すると殺人の疑いをかけられる危険もある。

本作にみる初枝ばあちゃんの死亡は大往生で、何の苦しみもなかったのは幸いだが、それは家族とスクリーンを見ている観客にだけわかること。したがって、死亡届を出さずに勝手に敷地内に埋葬してしまえば、初枝ばあちゃんの死亡が役所にも警察にもわかるはずがないから、年金の支給はもちろん、初枝が生存したままの対応をとることになる。それは周辺の人たちも同じで、あの土地明渡しを狙う不動産屋も、再度明渡しを求めて押しかけて来るかも？

本作を観ている限り、残された家族が初枝ばあちゃんの年金を不正受給しようと謀議する姿は見られないが、葬儀も挙げず死体を勝手に土の中に埋めてしまったのは、それが暗黙の了解・・・？

■□遺体発見の契機は？万引き家族の解体は？■□

本作のうたい文句は前述の通りで、決して万引きを奨励する映画ではないから、R指定されていないのは当然。しかし、導入部から前半にかけて治と祥太が見せる息の合った完璧な万引きプレーを見ていると、頭の固い教育委員会やPTAのおじさん、お婆さんからは、「これは万引きを招く映画だから、R指定しなければダメ」という声が出てくるかもしれない。しかし、私が常日頃主張しているように、何事においても教育では良い面と悪い面の両方を教えなければならない。そして、映画でも人間の良い面と悪い面の両方をトコトン突き詰めていかなければならないから、そこでは万引きはもちろん、不倫から殺人、戦争に至るまであらゆる人間の悪い面が描かれて当然だ。

そう考えると、本作に見る治と祥太の万引きのテクニックには感心しきりだが、それを幼いゆりに教えるのは如何なもの？予告編では、逮捕された後、記者たちからそれを聞かれた治が「私が教えられるのはそれしかありませんから」と答えていたが、そりゃ、答えになっていないのでは・・・。それはともかく、本作では祥太がはじめてゆりを連れて万引きの実戦に及んだとき、ゆりの失敗を祥太が尻拭いする形で万引きが発覚。警察官によって御用となるので、それに注目！

これによって、ゆりが万引き家族の下で生活していたことが明らかにされた結果、無事両親の元に連れ戻されたのはもちろん、生きていたはずの初枝ばあちゃんが今は土の中に埋められていることも発覚！前科のある治に代わって、信代が引き受けた死体損壊罪だけの比較的軽い懲役刑で終わったのは幸いだが、これにて「万引き家族」は解体されることに・・・？本作では、その直前、初枝ばあちゃんを中心とした家族で海に遊びに行き、何の屈託もなく波と戯れる風景が映し出される。そして、これこそが本当の家族、これこそが本当の家族の絆と思えたが、その解体は意外な形で、しかも早々と・・・。

■□■是枝監督のスタンスとこれからの挑戦は？■□■

本作がカンヌの最高賞を受賞したことについては、世界的にも異論はない上、国内の映画評論家からは「今年の審査員賞は素直に良作を選んでくれてよかった」と祝福する声が上がっている。例えば、5月21日付日経新聞は、「映画評論家の渡辺祥子さんは、カンヌは政治的問題が絡むような堅い作品が受賞する傾向にあり、身近な話である『万引き家族』の受賞は難しいかもと予想していたが、審査員長を務めた女優ケイト・ブランシェットさんは正しい人だと思う。とてもうれしい」と書いている。また、5月22日付朝日新聞社説は、「審査委員長を務めた女優のケイト・ブランシェットさんは閉会式で、人種差別、貧困、不法移民、政治対立などさまざまな矛盾を取りあげた作品が会した今回の映画祭は、社会から置き去りにされた『見えざる人々』に声を与えたと総括した」と述べ、さらに、記者会見した是枝監督はこれに対し、「引き続き『見えざる人々』を可視化していく決意を示したのは印象的だった」と書いている。

しかして、是枝監督は帰国後「賞に恥じぬよう」との決意を明らかにした上、「内向き日本に危機感」を持ち、「新作はフランス人女優ジュリエット・ピノシュさんを起用して、フランスで撮る」と宣言したから、すごい。さらに興味深いのは、林芳正文部科学相が対面して祝意を伝えたい意向を国会で示したことに対して、「公権力とは距離を保つ」として祝意を辞退する考えを自身のサイトで明らかにしたことだ。彼がサイトに載せた文章で、その根拠として述べたのは「映画がかつて、『国益』や『国策』と一体化し、大きな不幸を招いた過去の反省に立つならば、大げさなようですがこのような『平時』においても公権力（それが保守でもリベラルでも）とは潔く距離を保つというのが正しい振る舞いなのではないかと考えています」ということ。これを読んで私は、是枝監督の人物像にさらに感心、感服！

2018（平成30）年6月15日記